



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

「婦人解放の悲劇」自序

伊藤野枝

底本：「定本 伊藤野枝全集 第四巻 翻訳」學藝書林

2000（平成 12）年 12 月 15 日初版発行

「婦人解放の悲劇」自序

伊藤野枝

とうに『恋愛と道徳』が単行になつて出る筈であつたが、あれだけでは一冊とするにはあまりに貧弱(量の上に於て)だと云ふ書店の意見から、その後雑誌(青鞥)で発表したエンマ・ゴールドマンの『婦人解放の悲劇』と『少数と多数』になほ新に『結婚と恋愛』とゴールドマンの小伝を加へてやうやく出すことにした。なほ書店の要求を満足させるために自分は序の中に婦人問題変遷の歴史と云つたやうなものを書く筈になつてみた

のだけれど、そんなことは今の私には未だ^ま／＼荷が勝ち過ぎるし、それに書くと云つても、自分一個の(たとへ独断にせよ)見識でも確立しての上で、その動かない立場から批評的に書けるとでも云ふのならば^と ^{かく} ^い ^わ ^ゆ ^る 兎に角、どうせえらい先生方の御本を参考に^い ^わ ^ゆ ^る してアチコチとぬき書きでもする位が落ちになりさうなので、それは止めることにした。それに未だ自分は実の処『問題の歴史』だとかなんとか云ふことに興味を持つてはゐない。自分に興味のないことはなるたけやりたくない。ただ私は現在直接にブツ

カツタ問題として『恋愛』は女子の唯一の道徳であり、^い ^わ ^ゆ ^る 所謂『結婚』は恋愛とはまつたくその性質を異にしたものだと云ふことをこれ等の論文に於て一層ハツキリ覚り得たのである。そして私のぶつかった問題はまた現今わが国の社会に生存する幾多の若き姉妹たちの問題である。最も痛切な根本問題である。これは是非とも覚醒した自分達から実行し始めなければならない。然し自分達のすべてがほんとうに真実な

深い相愛生活を送らうと思ふと、これは実に容易な問題ではなくなる。一步—二步—
三步—と次第に深く進むにつれて根底に横はる性の問題を始めとして経済問題、倫
理問題その他さま／＼の社会問題に自然と自分の眼を転じなければならなくなる。

そして『最近の将来が解決しなければならない今日当面の問題は如何すれば人は自
分自身であると同時に他の人々と一つになり、全人類と深く感ずると共に各自の個性
を維持してゆけるかといふことである。』と云つたゴールドマンの言葉を今更繰返して考
へなければならない。自分達(Tと私)は日常生活のモトウとして『出来るだけ自己に
忠実に』と云ふことを心懸け、そしてそのために努力してゐる。自分達は自分達の生
活中からあらゆる虚偽を追ひ出し、自由にして自然な生き／＼した生活を営まふと努
めてゐる。自分達は今なるべく社会との交渉をさけてゐる。自分達は時々心弱くなつ
て無人島の生活を夢想する。自分達のやうにわがまゝでぢきムキになつて腹を立て

たり、癩に障^{さわ}つたり苦しがつたり、落胆したり、するものにはとても今の社会に妥協
してあきらめて easy-going な太平楽を云つて生きてはゆけない。全然没交渉な生活
をするか、進んで血を流すまで戦つて行くかどつちかだ。然し自分達は軽はずみに飛

び出して犬死はしたくない。で、イヤ／＼ながら我慢して先づ今の処なるべく没交渉
の方に近い生き方をしてゐる。然し自分達は自分達のやうに考へてゐるものが勿論
自分達ばかりでないと思へる時、そこに非常な希望と慰藉とが与へられる。日本に於
ける最初の真実の革命の曙光がもはや遠からず地平の上に現はれると信じてゐる
——否既に現はれてゐる。微かではあるが確かに現はれてゐる。自分達は決して落
胆や絶望をしてはならない。来るべき真実の生活の新生命は確かに自分達若き同胞
の中に芽まれてゐる。やがて自分達はほんとうに立上つて戦ふべき日が来ることと思
ふ。自分達は先づ知らず／＼自分達にこびりついてゐる無智や因習と戦はなければ
ならない。世間の気の毒な人等はたま／＼自分達を『新しい』と呼んでくれたけれど、

自分などはその言葉を心から受取るには未だ／＼中々旧い。もつと／＼新しくならなければならない。自分は近頃『サアニン』を読み、高村氏の訳された『未来派婦人の婦人論』等を読んでただ面白いと云つてすましてはゐられなかつた。自分達の Vital force の如何に貧弱に見えたことよ！そして自分達の周囲にゐるかの青白い顔付をして、猫背になつて『白魚のやうな』指先きでオチヨボロをしながら、碌そつぽ大きな声も出し得ずに琴を掻き鳴らす姉妹等の如何にミゼラブルに見えたことよ！そしてさういふ姉妹等と生活すべき運命を有する若き男性の如何に御気の毒に考へられた

ことよ。自分の連想はまたかの短髪ロシアの露西亜少女等を考へさせた。

自分は今この一小冊子を若き兄弟姉妹の中に送るにあつて、幾分なりとその人々の覚醒の糧にならんことを希望してやまない。『解放』と云ふのは髪の結び方をちがへるのではない、マントを着て歩くことでもない、まして『五色の酒』とかを飲むことではなほない。然し新しき服装を笑ひ、女が酒を飲むことを恐ろしき罪悪であるかの

如く罵つて高尚がつたり、上品ぶつたりしてゐる人等にはいよいよ愈々解放など云ふことはわかりさうもない。服装は個性ある者には趣味の表現であり、俗衆には流行である。酒は各人の単なる嗜好に過ぎない。いづれも眞の解放とはなんのかかはりもない。『解放は女子をして最も眞なる意味に於て人たらしめなければならない。肯定と活動とを切に欲求する女性中のあらゆるものがその完全な発想を得なければならない。

全ての人工的障碍が打破せられなければならない。おおい偉なる自由に向ふ大道に数世紀の間横たはつてゐる服従と奴隷の足跡が払拭せられなければならない。』

エレン・ケイに就いては自分は彼女の思想の中に、自分達と同じ系統をもつた意見を発見し彼女の議論に共鳴する或者を見出すことが出来る。彼女の思想に興味を持つことは出来るけれども自分にはそれ以上に彼女に親しみを持つことは出来ない。思

想の上には自分は彼女の為に可なり得たものがあると思ふ。^{しか}併し、より以上の興味をもつて彼女に注意をむけることの出来ないのは何故だらう。ゴールドマンに於けるが如き親しみを感じないのは何故だらう。自分は彼女に就いて云ふ何物をも持たない。唯だ自分は前にも云つたとほり彼女の主張が自分達のそれに共通であるといふ点に興味を持つて、それを紹介したに過ぎない。そしてこれ以上の言葉をエレン・ケイについて費やすことを好まない。彼女に就いては、下手な自分の言葉で云ふよりもより多く彼女を知つた人が沢山にあるから。近くこの書の出づるに先立つて本間久雄氏の手によつて彼女の多くの論文が訳されてゐる。エレン・ケイについて、なを多くを知りたい方々は、その『婦人と道徳』を御覧になるがよろしい。

ゴールドマンに就いて自分は沢山の言ひたいことを持つてゐる。自分は彼女の小伝を読むにあつて自分のもつた大いなる興味と親しみと熱烈な或る同情と憧憬を集中させて、いろいろな深いところから来る感激にむせびつゝ読んだ。『何と云ふすばらしい、そして生甲斐のある彼女の生涯だらう！』自分はある感慨に打たれながら心の中でかう叫んだ。まことに彼女の受けたなみ／＼ならぬ圧迫と苦闘を思ひその透徹せる主張と不屈なる自信とまた絶倫の勇氣と精力に思ひ到るとき云ひしれぬ悲壯な痛烈な感に打たれる。そして自分達のそれに思ひくらべるとき其処に大いなる懸隔を見出す。そしてまだ／＼自分達の苦悶はなまぬくそして圧迫は軽い。自分達はまだ苦痛のどん底までは行き得ないである。まだ本当につきつめた自分をば見出し得ないである。あらゆる精神上のまた肉体上の苦痛を噛みしめて戦ふ所まで行き得ないである。まだ殻の中でまご／＼してゐるのだ。殻を噛み破つて飛び出さないではゐられないまでの凄い程真実な要求をもつまでに成長してはゐないのだと云ふやうな事柄がハツキリと解つて来る。自分のやうな意気地のないともすれば妥協を欲するやうな者はもつと酷い圧迫を受け制裁を加へられてあらゆる苦悶を舐めさせられる機会でも与

へられなければとてもあのやうな立派な生活は出来ないだらう。自分は自分達のや
つてゐるある小さな仕事を発展させる為めにも各自の内部生活を確立させなければ
ならない。その前に先づ尊い自己の内部生命を生み出す苦痛を忍ばねばならない。
まだ自分達はやつとこの頃意識が動き出したばかりだ。この時にあたつて自分はゴ
ルドマンの如き婦人を先覚者として見出し得たことを限なく嬉しくなつかしく思ふ。そし
て自分はこの尊敬すべき婦人の熱誠をこめたこの書を 凡^{すべ}ての若き姉妹達の机上に
捧げたいと思ふ。

この書に収めたエレン・ケイの小伝は『恋愛と結婚』の序文でらいてう氏の手に訳され
たものをそのまま拝借したのです。私のこの小さいとなみに心からの同情をもつて
いろいろ助力下さつたことを感謝いたします。またエレン・ケイの写真は宮田脩氏が
お貸し下さつたものです。同氏にも深く感謝いたします。

私のこの仕事はまたTによつて完成されたものであることを私は忘れません。もし私
の傍にTがゐなかつたら、とても私のまづしい語学の力では完成されなかつたでせう。
この事は特にハツキリとお断りいたして置きます。

一千九百十四年三月

染井にて 野枝

底本：「定本 伊藤野枝全集 第四巻 翻訳」學藝書林

2000（平成 12）年 12 月 15 日初版発行

※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：Juki

2006 年 12 月 22 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。